
彼は優しいご主人様

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は優しいご主人様

【Nコード】

N6678U

【作者名】

Rail

【あらすじ】

ぶくぶくと太り、潰れたカエルのようにおぞましいほど醜い地方領主グレン・グレゴリー。彼はとある目的のために数多くの奴隷を買い集めていた。

そして今日もまた、美しいエルフの少女が彼の屋敷へと買われて来たのだった

現代で死んだ男が転生して、奴隷を買い集めて現代知識を生かしつつ成功する過程とその後の話。

* 当作品にはエロ要素やハーレム要素はございません。ラッキー
スケベすらございません。全年齢対象のほのぼの系です。そういつ
たものを期待されて読むと大変がっかりなさるのでご注意ください。

A面 エルフの少女、ティエラ（前書き）

<http://2chchcopipe.com/archives/51761911.html> これ見てどんな話か空想してぶっやったらこんな感じになるか空想した結果が残念なことだ。

A面 エルフの少女、ティエラ

部下が連れてきた見目麗しいエルフの女奴隷をみて、グレンは相好を崩した。脂肪でたるんだ顔がぐにやりとゆがむ。

奴隷は年の頃なら十代半ば。まだまだ子どもだ。

着ている服はほとんどぼろ布と変わらず、奴隷の印である鉄の首輪がやけに存在を主張している。

「今回はずいぶんとかわいらしいのを連れてきたな？」

ぶくぶくに太った指でグレンはできものだらけの顎をなでた。

「はい。つい最近北の方から入荷されてきたそうです」

グレンの腹心の部下であるエルフのアルバートは恭しく答えた。

同じエルフであるにも関わらず人間に仕え、なおかつ奴隷である自分を買ったアルバートに、エルフの少女は憎しみのこもった目を向けた。

「名前は？」

「ティエラと」

「気が強そうだ」

「見所があるかと思ひまして」

アルバートは涼しい顔で答えた。グレンは全身の肉をふるわせて笑った。

「お前の鑑定眼は信頼している。あとはいつも通りに」

「かしこまりました」

美しい辞儀をするアルバートに手を振ると、グレンは重厚なカーペットをぐしゃぐしゃと踏みつぶしながら部屋から出ていった。

「さて……」

アルバートがティエラに向き合う。ティエラは警戒して身を堅くした。アルバートはため息をつく。

「その格好で今のようにご主人様の目の前に出てもらっちゃ困る。まずはその汚いなりをなんとかしてもらおうか。たっぷり着飾って

お前を歓迎する宴に出てもらおう」

風呂場に連れて行かれながら、ティエラは先ほど見た太った蛙のように醜い自分の新しい主人を思い出す。そしてこれから自分の身に降り懸かるであろう災厄にティエラは涙を浮かべずにはいられなかった。

そして一時間後。

鉄の首輪の代わりに白いリボンを巻かれ、小奇麗な白いドレスで着飾られたティエラは、大広間のラグの上に座っていた。

「ようこそティエラ、グレゴリー邸へ！」

幾人もの声が重なり、魔法のクラッカーがぎやかに音を鳴らす。蓄音機からは美しい調べが流れていた。部屋にいくつも置かれたカーテーブルの上には豪華なご馳走が並んでいる。至るところに花が飾られ、なぜか色紙でできたわっかの飾りらしきものや謎の模様が書かれた旗が連なったものなどが天井や壁を這う。

ティエラの歓迎の宴、すなわち新人歓迎会が盛大に開かれたのであった。

彼女の周りには二十代から四十代に至るまでの男女が集まっていた。この邸の使用人たちだ。

ポカンとしているティアラの様子を、使用人たちは笑った。

「歓迎するよ、ティエラ」

「そんなに緊張しないで。誰もあなたをとって食ったりしないわ」

「僕はテッド。よろしくね！」

「俺はマーカス！ 初めましてティアラ！」

次々とかけられる暖かな言葉に、ティエラは眼を白黒させた。

ティエラは間違はなく奴隷だった。村が賊に襲われ、両親は反抗して殺され、ティエラは捕らえられて奴隷商人に売られた。嫌な気

配のする鉄の首輪もつけられた。

奴隷に人権はない。この先ぼろ雑巾のようになるまでこき使われるか、死にたくなるくらいの恥辱を味わうのだからとばかり思っていた。

それがなぜだかわからないが、現在ティエラの首から首輪は取り外され、代わりに柔らかで高級そうな白いリボンがつけられていた。それに合わせてか、彼女に着せられたドレスも白く、上質で上品だ。いつまで立つても固まっているティエラに、周囲からは暖かい視線が向けられていた。

「アルバートってばまた新人に教えなかつたんでしよう！ 性格悪いわ！」

肌の黒いエルフ 海エルフと呼ばれる の少女がぷりぷりと頬を膨らませる。

彼らと同じくティエラの歓迎の宴に参加していたアルバートは眉を上げた。

「教えたって信じないんだから、労力の無駄だと思わないか？ 百聞は一見にしかずだ」

「そんな難しいこと言われてもわかんない！」

「勉強をさぼって遊んでばかりいるからだ」

「へーんだ！ アルバートの石頭！」

「知恵の数より毛が多い奴に言われてもね」

「まあまあ二人とも、主役がいるのに喧嘩なんて今日くらいは止めてよ」

全身がうつすらと白い毛に覆われた獣人の女性が仲裁に入る。

ティエラはその様子をただただ呆然として見ていた。

と、そこへドワーフの男がやってきて、ティエラの隣にどっかりと腰を下ろした。

「新入り、あつけにとられてるな。気持ちは分かるよ、俺も最初はそうだった。まあ飲めよ」

そう言っただワーフの男がティエラの杯に並々とワインを注いだ。

「ね、どこから来たの！？ 好きな食べ物何！？ 趣味は！？」

眼をきらきらさせながら小さな妖精がティエラの周りを飛び回る。

「みんな、落ち着いて！ ティエラもおなかも空いてるんじゃない？ 食事を始めましょう」

人間の若い女性が手をたたいて言えば、方々から同意の声があがった。

そうして、歓迎会が始まる。

戸惑うティエラに、邸の使用人たちは優しく接してくれた。

頬の落ちそうなほどおいしい食事をほおぶりながら、これは夢じゃないのかとティエラは自身の膝をつねったが、幸い夢ではないようだ。

ティエラは使用人たちから一人一人丁寧な自己紹介を受け、挨拶を交わした。

と、ノックの後に大きな扉が開いた。入ってきたのは先ほど見たティエラの新しい主人グレンだ。

ティエラはぎくりと身をこわばらせた。先ほどとは印象が多少変わったとはいえ、おぞましいほどの醜さだ。

「急な仕事が入ってな。遅れた」

「まだ始まったばかりですわ」

獣人の女性が笑う。

次々と使用人たちから声をかけられるのにグレンは鷹揚にうなずくと、使用人たちと同じく床の上に座った。

「私のことは気にせず、続けなさい」

そういつてグレンがグラスを持つと、アルバートが素早くその中にワインを注いだ。

使用人たちはグレンの言葉通り、めいめいに食事を再会した。

主役であるティエラの周囲には再び使用人たちが集まる。

「アルバートから聞いたかもしれないけど、あの方が私たちの主人

のグレン様よ」

獣人の女がにこやかに言う。

「顔は滅法凶悪だが、気は優しく力持ちだから心配するな、新人」
ドワーフの男がティエラの肩をたたいた。
とはいえ、ティエラは不信が拭いきれなかった。

所詮奴隷を買うような男だ。いつ夜伽を強制されるかもわからない。邸の人間だって、新人を陥れる為に演技をしていないとも限らない。

あんな醜くてぶくぶくに太った人間、性根だって腐っているに違いない。

宴の途中でグレンは仕事があるからと抜けたが、彼の通った場所に悪臭が漂っているような錯覚を覚え、ティエラは眉をしかめた。

「ティエラ、言いたかないけど、人を見た目で判断するのはバカだよ」

海エルフのエイダが苦々しげに言う。

元々森エルフと海エルフは種族的に仲が悪いということもあり、森エルフであるティエラは苛つきながらエイダを睨んだ。エイダもティエラの態度に顔をしかめ、舌を出した。

「森エルフ様はみんな嫌味で性格が悪くて頭が固い連中ばかり！
そう言うтусつくと立ち上がり、そのままティエラから離れていってしまった。

エイダの失礼な発言に憤然としたティエラだったが、人間の女性であるエイミーにたしなめられたので我慢した。

「あなたの気持ちも分かるのよ。でも、もっと素直な気持ちでここでの出来事を受け止めてほしいの」

そう笑うエイミーにすら警戒心を抱いたティエラだった。

それほどに、ティエラの奴隷生活は過酷だったのだ。

その後、うっかりワインを飲みすぎてしまったティエラは、早々に潰れてしまった。

アルバートによって使用人室のベッドに寝かされた彼女は、疲れも出たのかそのまま翌日までぐっすりと眠ることとなった。まるで夢のような一日だったと思いつつながら。

B面 グレンの野望

現在三十代半ばのグレン・グレゴリーは、齡十六にして唐突に前世の記憶を思い出した。

彼の前世は日本人であり、とある小さな会社の課長であつた。

死因はいわゆる過労死。関連企業に役職は昇進して出向したのはいいものの、朝七時には会社に出勤し日付が変わるまで帰れない、そんな激務の日々が続いた結果の過労死だつた。

そして彼が生まれ変わった先は、人間以外の種族も当然として存在し、なおかつ魔法という自然科学では解き明かせないような不思議な力が存在する世界だつた。

彼の肩書きを説明するなら、そこそこ田舎の領主。十年前に先代領主であるグレンの父が引退して引継が終わったため、グレンが新しい領主である。

父の仕事の補佐をしていた時もそうだったが、いよいよ領主に就任した彼は思った。

領主というのは、国という巨大な企業から地域の運営を任せられた管理者であり、それすなわちエリアマネージャーである、と。

さらに言うなら領内の運営はかなりの裁量が領主に任されているため、実質彼はこの領地の取締役、すなわち社長であるとも言える。彼はときめいた。

前世では平社員から苦勞して管理職になつたというのに残業手当がつかない状態で平社員の時よりもさらに激務を課せられ、さらには権限は激しく制限されていた。商学部で学んだ知識をちっとも活かせずに悔しい思いをしていた。

それが今や領主という役職を得たことで激変したのだ。
他の領主から見れば田舎のそれほど良くもない領地だろう。国から興味も払われていない。しかし彼からすると一国一城の主になったようなもの。

税の徴収は財務や経理の仕事。公共工事は施設管理。働かせる役人については人事。収益を上げようとすることは営業や企画と言えよう。

そう。前世ではさえない課長だった彼は、異世界で社長となったのだ。

異世界では魔法が使えるせいかわからないが、工業の発達が大変遅れていた。情報網も発達していない。工場ではなく工房で職人が頑張るのが主流だった。

そして彼は思ったのだ。

商学部で学んだものの、日々成長していく現代日本ではすでに使えなくなった理論。それを今こそ使うべきではないかと。

日本人だった時の記憶を思い出した彼は、学校の図書館の文献を調べながら呟いたのだった。

「テイラーの科学的管理法って、通じるかな？」

彼の表情は玩具を目の前にした子供のようであった。

とまあ、それだけならば彼の人生は勝ち組だと言えただろう。領主は基本的に世襲制。グレゴリー家の後継ぎは彼だけで、他に兄弟はいない。

が、彼には致命的な欠点があった。

容姿がひどく醜かったのだ。

顔の作りというレベルではない。何を食べても太り、水を飲むだけでも太る異常な体質で、以前に断食したときには少しもやせなかつたくせに地味に死にかけた。

仕方がないので現状維持につとめているが、容姿だけでも初対面の人間には生理的に嫌われる。邪悪で醜悪に見えるらしい。

彼の父は多少顔の造形が悪いというところがあった。母は太りやすい体質だった。グレンは両親の悪いところを受け継いだのである。あるいは母親が彼を妊娠中に何か神様やら妖精やらに悪いことをした天罰かもしれない。

とかく、グレンにはどうしようもないことなのである。

そしてそれは周囲にも言えることであった。

学都と呼ばれる場所へ留学へ行く前、グレンはあまりよろしい後継ぎではなかった。これが将来領主になるのかと思うと暗澹たる思いを皆抱いていた。

しかし留学から帰って来たグレンは顔つきも言動もすっかり変わり、いかにもやる気のある、未来を担うにふさわしい心持に代わっていた。

が、なにぶん醜い。視界に入るだけでもおぞましい。気分が悪くなる。

生理的嫌悪程やつかいなものはない。皆グレンの性格が悪くないことは知っていたのだが、一人が屋敷を辞するとそれにつられるように次々と辞めていった。特に女性はひどかった。女性自身が厭うこともあれば、その両親が娘の身を心配して攬うように連れ帰ったこともある。手籠にされると危惧したらしい。辞めていった女性達

も同様である。

機械があろうとそれを操る人では必要である。機械すらない世界では、機械の何十倍もの手間がかかる手作業で仕事をしなければならぬ。

そんな状態での人手不足は致命的だった。

頭を抱えたグレンは、ある時出先で奇妙なものを見た。鞭を持った男が何人もの男女を鎖につないで引きつれているのである。

「あれはなんだ？」

「奴隷商人でございましょう」

長年グレゴリー家に仕えている執事が答えた。

奴隷と聞いて彼は留学中に学んだ知識を思い出した。

労働力としての人手が必要となるこの世界では、数多くの奴隷が存在した。

家事、農業、工芸、夜伽、他もろもろ。様々な用途がある。比較的知識を持った奴隷は値段が高い。また、顔が美しいものも値段が高い。よほど使い道のない奴隷でなければ転売も可能だ。奴隷は人ではなく財産扱いなのである。

財産の管理は個人の裁量に任されている。大事にするも使い捨てるも自由だ。

地球の奴隷との違いとして最たるものが制御装置の存在だろう。重々しい鉄の首輪で、決して主人の許可なしでは外れない。無理に外そうとすると魔法の効果で奴隷に苦痛が与えられる。それだけではない。制御装置は主人の命令一つで奴隷に苦痛を与えることができるし、発信器のような居場所を特定する機能も付いている。主人が許可した以上の距離を離れると、これまた奴隷が苦しむという塩梅だ。

この恐ろしい首輪のせいで、人攫いの被害者であろうと自ら身売りした人間であろうと、奴隷を買った主人には逆らえないし逃げられないというわけだ。主人が自らの意思で奴隷を解放して制御装置を外した場合は別であるが。

習った知識を一通りおさらいした彼は考えた。

つまり、奴隷を買えば一生その奴隷を使うことができるわけだ。転売も可能というのならば、つまり奴隷というのは長期資産の一種なのだろう。しかも運用しだいによっては資産価値を増やすことも可能と言っわけだ。

さらに言うなら、奴隷が主人に逆らえず、余所へ行くこともできないというのならば、散々技術を仕込んだ場合でも余所に引き抜かれるという事態には陥らないということだ。

奴隷を使う上では給金を出す必要はないが、食費や生活費などはこちらで準備しなければならぬ。が、そんなもの、住み込みが当然のこの世界では普通の使用人を雇ったところと同じである。

奴隷を買ったとなつては初期費用は高いが、長く使えば減価償却もできるのではないだろうか。耐用年数は馬鹿長い。

また、通常の退職金は雇用している期間に積み立てておく後払いの給料であるが、奴隷の購入費用は給料の先払いと考えればとんとんではなからうか。

そして彼はグレンは閃いた。

つまり、奴隷を買ってことは、終身雇用することであると。

A面 歓迎会の翌朝

歓迎会の翌朝、ひどい二日酔いのティエラを眠りから覚ましたのはエイダの不機嫌そうな声だった。

「いい御身分ね！ 初日から酔いつぶれて二日目には寝坊？ もうお日様だつてすっかり昇ってるんだからさっさと起きなさいよ！」
甲高い声が頭に響き、痛む頭を押さえながらティエラはノロノロと体を起した。

「もう朝……？」

「そうよ！ 朝食の時間に遅れちゃうわ。早く起きて準備なさいっ」
一気に言い切ると、エイダは真新しい服を一式ティエラのベッドの上に投げ出した。ご丁寧にも下着まで準備してある。ベッドのわきには真新しい靴も用意してあった。

寝起きで頭が回らないティエラは、二度ほど瞬きをしてその服を見つめた。

「お仕着せ！ うちの制服よ。まさかそのドレスで仕事する気じゃないでしょ？」

反応の鈍いティエラにいらついているのか、エイダは腰に拳を当ててふくれっ面で言った。

昨日のエイダは年相応の可愛らしいチュニックを着ていたが、今日はシンプルな紺色のドレスを着ていた。ティエラに渡されたものと同じものである。肩にかかる程度のパーマっ毛の強い赤茶けた短い髪をポニーテールにして白のリボンでまとめている。

「いい？ ここの水瓶と洗面器は使っていていいわ。タオルも置いてあるから。そのリボンは首につけたままにしときなさい。十分で支度して」

チェストの上を指差したエイダはつつけんどんな態度で言う。

「え、うん……」

「早く！ あと九分！」

「分かったわよ！」

大きな声でせつつかれて、ティエラは眉をしかめた。これだからガサツな海エルフは嫌いなのだ。

結局十三分かかってティエラは準備を完了させた。

「うん、服はちゃんと着れてるみたいね」

ティエラの身だしなみをチェックしたエイダは満足げに頷いた。

「当り前でしょう。人を何だと思ってるの」

その態度に腹を立てたティエラが少々恨みがましく言うと、エイダはあつけらかんと言った。

「買われたての奴隷でしょ。まだ雇用契約結んでないんだし」

唐突に奴隷という現実を突き付けられたため、ティエラは思わず衝撃を受けて固まった。後半の言葉を聞き逃すほどに。

「さ、ご飯食べに行くよ。ぐずぐずしてたら朝礼に遅れちゃう」

動き出さないティエラの腕をエイダがとった。そしてそのまま引きずるように部屋を出る。

体調不良と相まって顔面蒼白になっているティエラを見て、獣人の女性クレアがすっ飛んできた。彼女もまた、紺のドレスを着ていた。

「あらやだ、顔色真っ青じゃない。やつぱり昨日ブルーノが飲ませ過ぎたんだわ。今すぐ治してあげるからね」

言いながらクレアはティエラの目の前に手をかざした。短い詠唱の後にその手が淡く光り、ティエラの体調の悪さが和らぐのが分かった。治癒魔法だ。

「エイダ、入ってきたばかりの子は気をつかって上げなさいって言ったでしょう？」

「単なる二日酔いじゃん。心配しすぎだよ」

「二日酔いで新人研修を受けさせたら能率が悪いでしょ。二度手間になった分はあなたにしわ寄せが来るのよ」

「はい」

お母さん然とした調子でお小言を言うクレアに、エイダも落ち込んだ様子で返事をした。

「まあそう叱ってやるなや、クレア。新入りも腹を空かせてる。早く飯を食わせてやれ」

「元はと言えばあなたが無理やり飲ませたからでしょう、ブルーノ！」

近くを通りかかってかつかと笑うドワーフをクレアが睨んだ。ブルーノは怖い怖いと肩をすくめてそのまま歩いて行った。クレアはため息をつく。

「とにかく、朝ごはんにしましょう。朝礼に遅れちゃうわ」

とりあえずその言葉に頷きながら、内心でティエラは首を傾げた。先ほどから彼女たちの言っている朝礼とはなんだろう？ と。

しかしそれに対して上手く質問をすることができないままに朝食を食べることになった。食堂に給仕係はおらず、自分たちでカウンターまで行って料理を貰ってくるらしい。四角いトレイの上に載せられたのは主食の焼きたてのライ麦パンとソラマメのスープ、そしてスパイスの香りが漂うキャベツと鶏肉の炒め物だ。少量だが、新鮮なミルクももらえた。いずれにせよ、奴隷商の所にいたときの食事とは雲泥の差だ。

「ご飯は一日三回、決まった時間に食堂で食べるようになってるの。昼食に限って朝か前日に言っとけばお弁当も作ってもらえるのよ。来るのが遅いと料理がなくなっちゃうときがあるから気をつけて」

と、クレアが説明する。エイダは配ぜんの係に頼んで大盛りにしてもらった料理を勢いよく食べていたため無言である。海エルフは森エルフに比べると体力があり、食欲も旺盛なのである。まるまると太ったソラマメも、あつという間に噛み砕かれてエイダの腹の中へと納まっていく。

「あそこに時計があるでしょう？ あれが八時になったら朝礼が始まるから、それまでに広間に行くようにしてね。あとエイダとはこれから同室になるけど、彼女が寝坊するようなら叩き起こして」

「ひふれいな！ わはひはねぼうしない！」
「今日はね」

クレアが呆れた顔で言う。

ティエラは何とも言えない気分になっていた。

彼女の奴隷としての区分はオールラウンド。つまりなんでも可。といっても、こと森エルフの奴隷というのは見た目が良いものが多いので、大抵は金持ちの変態に買われることが多いと聞いていた。が、昨日からの様子を見るに、まるで地方から出稼ぎにきたのと大差ないではないか。

奴隷は高価な商品だ。替えの利く使用人とは違う。

わからないことほど怖いことはない。

先の見えない不安がティエラを苛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6678u/>

彼は優しいご主人様

2011年12月3日00時45分発行